

遠藤周作『スキャンダル』論 ― 実存分析の視点から見る勝呂の心理・精神状態 ―

倪 楽 飛

はじめに

遠藤周作の純文学書下ろし長編小説『スキャンダル』（新潮社、一九八六年）の中の最も大きな謎は、主人公であるクリスチャン作家勝呂の贗者、「分身たる男」の正体は何か、ということにあるだろう。この作品に託された「悪の問題」の解決は勝呂が遭遇したこの異常な心理現象或いは心靈現象の謎を解くことにかかっていると、いっても過言ではない。しかし、これは決して容易に解き明かせる謎ではあるまい。その難解さは、分析心理学領域の専門家河合隼雄氏の評論から窺うことができる。

その人物はいったい誰か（「…」）。これに対して、現代の精神病学の知識が提供し得る解答は、二重人格か、二重身（自己像幻視）か、あるいは集団ヒステリーによる幻覚症状か、或いは勝呂と瓜二つの人物が実在していて悪事をはたらいているか、の

いずれかである。しかし、本文を注意深く読んでゆくと、このいずれかであるように見えながら、そのいずれの可能性もだんだんと消されていっていることがわかる。つまり、解答は不明なのである。（傍線は引用者による。以下同じ）

河合氏にとっても、『スキャンダル』はやはり一種のミステリーと見なすべきである。確かに、主人公勝呂に見られる病理現象は現代精神医学の理論では説明しきれない部分が多く、勝呂の状況に対して、完全に当てはまるような診断を下すことは不可能であろう。そもそもそうする必要もないかもしれない。というのは、遠藤自身が『人生の同伴者』（春秋社、一九九一年）の中で、この小説は「意識下の世界を書いているんで、意識の世界を書いているわけじゃない」と言明したように、「分身たる男」の出現を事実のレベルにおける現象ではなく、勝呂の精神状態の象徴として考えるほうが妥当だからである。本稿ではオーストリア精神科医ヴィクトール・フ

ランクルによって確立されたロゴセラピー^②を援用するが、それは精神療法的アプローチでこのミステリーに合理的な解釈をつけるためというよりも、実存分析^③の視点から勝呂の心理・精神の動きを確認して考察するのが一番大きな目的である。そうすることによって、別の拙論^④で考察したエーリッヒ・フロムの謂う「ネクロフィリア的な傾向」^⑤がなぜ、そして如何にして勝呂を悪の淵までに連れて行ったのかを明らかにしたい。

『スキャンダル』の終盤、勝呂は完全に「悪」の深淵に陥ってしまふ寸前に懸崖勒馬し、「我に返った」。雪が舞っている大通りで、自分とそっくりの男は五十メートルほど先に「ふりむきもせず」「歩いている」。男は次第に「愛と慈悲にみち」た優しい光を発している白い雪に吸い込まれ、姿が消えた。一人になると、「憐れみたまえ」「心狂える人間を憐れみたまえ」という祈りの言葉が勝呂の口からこぼれ、勝呂自身もますます強くなった光に包み込まれている。右の引用に暗示されたように、結果的に、勝呂には救いが与えられた。しかし、真夜中、発信元不明な電話がまた来て、新たな試練を宣告するかのように執拗に鳴り続けている。「さて、どうする」という懸念が残されたまま、作品は幕を閉じる。「分身たる男」はまたいつか勝呂の生活に闖入するかもしれない。勝呂と成瀬夫人との関係はまたさらなる発展があるかもしれない。一つだけ確かなのは、勝呂は救いのない「醜悪世界」に陥っておらず、救いの可能性がまだ

彼にある、ということである。しかし、勝呂に与えられた「救い」を一体どのように捉えるべきなのだろうか。また、これからの「救い」が如何にして可能になるだろうか。これらの問題を、実存分析の視点から考察し、これまでの『スキャンダル』研究、また遠藤文学研究において欠けている実存的関与を補う形で新たな解読の可能性を提示するのが本稿の狙いである。

一、問題の所在

勝呂が直面している信の問題は何か、また彼にとっての救いの可能性を考察するに当たっては、改めて彼の人物像を確認することから始めるのが妥当であろう。

これに関する先行論はかなりの程度までに蓄積されてきた。しかし、恐らく「分身」や「もう一人の自分」などの言葉に誘導されたためか、従来の研究では、「贗者」の男を勝呂の無意識のなかに抑圧された「慾望」、「悪の象徴」、悪をする「別の人格」などと解釈し、さながらそれが勝呂の人物像の内面を構成するものであるかのように読解を行う傾向がよく見られる。是か非かはさて置き、こういった解釈には明らかな欠陥があると言わざるを得ない。というのは、「贗者」の出現は勝呂の異常な心理・精神状態によるものであるという事実を顧みず、これを勝呂が常に持っている密かな衝動・欲求と考えると、一時的な危機を日常的なものと誤認し、これまで

の勝呂の人生に対して不適切な評価を下してしまう恐れがあるからである。

例えば、河合隼雄氏（前出）は、勝呂が「立派な自我を作ること」に力を入れ過ぎて、その「社会的にも称賛される」クリスチャン作家という「自我」を維持するために、必死に「性・死・醜」といった「汚れたもの」を心から排除し、結局「心にも体にも大きな負担をかけてきた」だけでなく、「人間存在の統合の回復のために」夜な夜な働いている「たましい」も汚染されてしまった、と述べている。勝呂が「あまりにも性急に性・死・醜などということを排除しすぎ」て、「彼のたましいへの通路には彼の自我の棄て去ったものが溢れており、たましいとの接触の回復の仕事がさながら下水工事のような感じを呈することになった」という。「贖者」の男がつまり「たましいへの通路」を塞いでしまった「汚れたもの」であるという氏の論旨には、まさにユング分析心理学の〈影〉^{シヤドウ}の概念が反映されている。「たましい」の働きに注目する河合氏の論は非常に示唆深い視点を提示している。しかし、氏の論法に従えば、「清く正しい生き方」で人生を送ってきたクリスチャン作家という勝呂の〈自我〉はただの社会的顔・仮面^{ペルソナ}に過ぎないということになってしまう。〈ネクロフィリア〉Ⅱ〈悪〉の問題が全く言及されていない点に関してはなおさら言うまでもない。

また、大塩香織氏も、勝呂が常に「基督教作家」という「他

者に映る自己像を壊したくない」意識を持っていることを前提に論を展開している。勝呂はただ「他者によって描かれた自己像」を「演じ」ているだけで、妻にとつての「いい夫」も自己像に準じて作られたものであり、しかも勝呂はその「自己像こそ自分自身である」と疑っていな^くて「満足していた」、という。そして、その「自己像」が「成瀬夫人と〈贖者〉によって脅かされる」とき、「勝呂の意識に死が浮かび上がってくる」。したがって「勝呂の死への恐怖と憧憬とは、自己像のない世界への恐怖と憧憬を意味」する、という結論を付けている。勝呂には「小説家として他者に映る自己像を守ろうとする」願望があり、死への恐怖は即ち「自らが失われていくこと」に対する恐怖である、という部分には賛同できるが、一方で勝呂はまた「この世で作り上げられた自らを全く無にしようとする願望」を持って死を憧憬している、という氏の論には、「自己像を壊したい願望」がどこから来たのかに関する考察が欠けている、と言わざるを得ない。その他、二つの願望の持ち主である勝呂の主体性をどのように捉えるべきか、という問題も残されているように思われる。

いずれにせよ、勝呂の人物像の「大成したクリスチャン作家」という側面が問題視される点は多くの先行論において共通している。確かに、勝呂の人生の危機が彼のこれまでの生き方と無関係であるとは決して言えない。その背後には抑圧、折り合い、正当化などと魂の様々な働きがあることに間違いなからう。しかし、だからと

言って勝呂のすべての「いいイメージ」——公的領域における「立派なクリスチャン作家」と私的領域における「いい夫、いい父親」——は紛れ物・外面（そとづら）・仮面（ベルソナ）に過ぎず、逆に「贋者」の男が象徴する「覆われしもの」・「隠されたもの」^⑤こそ本当の顔であり、少なくとも勝呂の「二面性」の中の一つだと断言するのも適正ではない。公私を含む社会的に良い顔を単なる剥ぐべき仮面とすることは、勝呂の人間性を病的なものとして貶め、彼のこれまでの人生の意義・価値、他者に与えた慰めや善意をただの嘘・虚偽として帳消してしまうことにつながる。それに、むやみに仮面を剥ぐことは、精神不安定の人の救いにはならないばかりか、勝呂の場合、人間存在の意味・価値を否定する〈ネクロフィリア的な傾向〉に加勢し、彼を死と毀滅の暗闇に押し込むのに助力することになりかねない。

そもそも、人物像を考える際に、精神分析の〈自我〉と〈エス〉だけに注目し、外面と内面を分別して考察することはそれほど人間魂に関する真実を提供することができて、またどれほど人に希望を与えることができるだろうか。外面と内面をあたかも人の全体を構成するようなものとし、つまり人間存在を外面と内面のせめぎ合いによって決められたものと見なす考え方は、ある意味では人間性を恒常性の玩弄物に矮小化しているのである。本質主義の人間観であれ構築主義の人間観であれ、人間には意味を求める自由な意志が

あるという実存的な事実をあまりにも無視しすぎると、結局は下位人間主義と定義されうる還元主義に転落してしまう危険性があるのだ。次章では、心理次元における様々な欲望ではなく、精神次元における〈責任性〉と〈意識性（意志）〉を重視する実存分析の視点から、勝呂の「クリスチャン作家」及び「いい夫」のイメージを考察する。

二、勝呂の人物像

1、「クリスチャン作家」のイメージ

実際、「クリスチャン作家」という〈顔〉が最初から社会的に望ましい〈自己像〉であるとは全く言えないのだ。出立期の勝呂は理解されるところか、孤立させられ、嘲られ、「偽善者」と思われても怒りや悔しさを吞み込んで、弁解せずに我慢するしかなかった。勝呂のかつてのライバルでありながら、一番の理解者で親友でもある加納の言葉によると、勝呂は「クリスチャン作家」として、実は長い間非常に「不幸で」苦しかったのである。にもかかわらず勝呂は三十年以上にわたって悪戦苦闘して、自分の信仰を作品に書き続けてきた。しかも彼は「宗教のために文学を犠牲に」して、立派な信仰者の形象のために「美しい、きれいな話」ばかりを書くような作家にならず、人間の心の「黒い、暗い、醜い領域」を黙殺したり無視したりすることせずに小説を綴りながら、宗教の真実を探究して

きて、「やっと動揺から救われた」自信を獲得したのである。

〈自己像〉または〈顔〉自体が最初から目的でも目標でもなく、勝呂は「日本という風土と」キリスト教を「どのように調和させるか」を自らの課題にし、自分の良心に呼応できるような答えを探し求めてきたのである。実存分析で言い換えれば、勝呂が自分に課した文学の課題は彼にとって一種志向すべき〈人生の意味〉(Der Sinn des Lebens)¹¹を成しているのである。そして、この〈意味〉は彼が好みで勝手に決めたものではなく、自分が置かれた、日本においては人の心の中の「暗い旋律、醜い響き、おぞましい音にも応え」てくれる「本当の宗教」が必要不可欠だ、という客観的な状況から見出したものである。従って、勝呂が本当に常に力を入れた営為は「社会的にも称賛される」「立派な自我を作る」ことではなく、キリスト教の真実を自分も含む日本人の心に合う形でより多くの人に実感できるように伝える、という〈意味〉を実現させることなのである。「クリスチャン作家」という〈顔〉がようやく社会的に称賛されるようになり、他者に映る勝呂の〈自己像〉がようやく立派なものと思われるようになったことは〈人生の意味〉の実現に付随する効果、ボーナスのようなものに過ぎないのだ。無論それも大切で、その〈顔〉もしくは〈自己像〉を誇りに思っ守ろうとする願望があっても、不自然でも不思議でもないであろう。だがそれは誇りや自尊心のためというよりも、〈意味〉の実現に対する責任感のほう

が大きいというべきである。

〈責任〉に関して、勝呂と加納の間に次のような会話がある。

(加納)「……お前は牢固としたお前の世界を作ったじゃないか。

勝呂さんの書いた小説なら必ず読むという読者が一万人はいると出版社の誰かが言っていた」

(勝呂)「そんなにいるものか」

(加納)「いや、いる……だからその読者が持っているお前のイメージを大事にしないで、いやいけないぞ。お前は意地でもその世界を……」

加納の「読者が持っているお前のイメージ」という表現は実に意味深い。清い「クリスチャン作家」というのは確かに勝呂のイメージとは言え、勝呂のためにあるものではなく、読者のために作られ、守られ続けなければならないものなのだ。加納の忠告はまさに勝呂に、少なくとも「一万人はいる」と言われる忠実な読者に対する自分の責任を想起させるためのものであると考えられよう。或いは、加納は勝呂の魂の代わりに、彼が自分の文学世界に託した抱負や使命を言い表したのだとも言えよう。三十年を超えた長い付き合いの中で、理想や憧憬などについての会話が数えきれないほどあったに違いない。加納は、なぜ勝呂が「クリスチャン作家」という名、「クリスチャン作家」としての人生に頑なにこだわっているのかを誰よりも知っており、その「イメージ」の背後にどれだけの意味がある

のかも分かっている。その「イメージ」を守ることは勝呂自身にとって重要である以上に、読者にとって重要なのだ。実は、この点は出版社の編集者である栗本の話によっても裏付けられている、「先生は読者のためにもその男をつかまねばなりません」という。

しかし、今の勝呂の身に見られる「病徴」は、彼が自分の「クリスチャン作家」という「イメージ」に託した意義・価値、またこれまで三十年の苦労が成就した業績を全部否定しようとするところにある。例えば、あるサイン・パーティの後、学生時代から勝呂のファンになった一人の青年が彼のところに来て、勝呂の作品に感化されて、身体障害児の施設での今の仕事に喜びを感じたことを告白する。

勝呂は気の重さから逃げるために、自分の小説には「読者の心を変えるほどの価値はない」と青年に呟く。青年は「いいえ、ありますあるんです」ときっぱりとした声で答え、自分が来月洗礼を受けることを付け加えて言った。それを聞いた勝呂は「自分の本が一人の人間の人生に方向を与え」たことに喜びを感じることができなかった。「自分が偽善的な人間のような気がして」眼を伏せ、出口で蔑むような目線で自分を凝視している男（小針）の冷笑を薄々感じながら「誰かを教導するために今日まで小説を書いたのではなかった。基督教を宣伝するために小説家になったのではなかった」と自己否定をした。勝呂は自分の「心の中心部にある歯車が不意に狂いはじめた」と感じ、その「狂いの原因」が「あの授賞式の夜から」彼の

世界にあらわれ、「今日まで噛みあってきたもの」をあえないようににした「もう一人の私」にあることが分かっている。しかし、今の彼にはそれに打ち克てる術も気力もなく、渦巻きに吸い込まれるようにひたすら否定や懐疑の力に身を任せ、「何の意味があるかわからない」暗闇の世界に堕ちていくだけである。

明らかに、この時点での勝呂の自己否定は、本当の自分の「内面」を曝け出す誠実さというよりも、むしろすでに彼の意識に侵入した〈ネクロフィリア的傾向〉に因んだ〈人生の意味〉に対する破壊的な衝動によるものであると捉えるべきであろう。

2、「いい夫」のイメージ

では、私的領域において、勝呂の妻にとっての「いい夫」というイメージはどうだろうか。結婚以来、勝呂は「いい夫、いい父親の姿勢をとってきた」。妻との間では「生活の均衡を乱す行動は減多に取らな」いし、「彼女を不安にさせる言葉も努めて口に出不さな」ようにしてきた。妻が仕事場に掃除に来た時は「一人で執筆している時とは違った家庭むきの顔をした」が、それは「勝呂にとって別に作為でも何でもなく、芝居でも偽善でもなかった」。時々、夫婦二人は散歩に出かけ、「公園のベンチに腰をかけ、（…）何も言わなくても三十年以上の人生を共にした夫婦にはたがいに均衡のとれた静かさが」感じられる。勝呂は「原稿用紙の上には、自分の内部

を覗きこみ、それを吐きだす小説家だが、妻との生活では必要な限界をこえて自分を曝けだすまいとした。それがクリスチャンの家庭に育ち、修道女のいる学校を出た妻へのいたわりだった」、という。三十年以上も継続している「いい夫」のイメージは演技によるものだけであるとは想像し難い。たとえ演技があったとしても、「家庭むきの顔」は勝呂にとって「芝居でも偽善でも」ないので、彼は意図的ではなく無意識的に「いい夫」を演じてきたとしか言えないであろう。そして、ただの演技よりも、その無意識のなかに確実に感じられるのは、「妻へのいたわり」、彼女を不安にさせたくない思いやり、または夫として夫婦間の平和と均衡を保つ〈責任〉なのではないだろうか。

しかし、今の勝呂の気持ちに少し異様なものが浮上してきた。あの日の夕暮れ、掃除を終えた妻は「頬に子供をからかうような微笑をうかべ」、勝呂に「たまには教会にいらっしゃらないとね」と言った。妻のその顔を見て、勝呂はある外国の短編小説を思い出した。

それは一人の中年男と妻との関係を書いた佳作である。妻は文字通りやさしい良妻で、夫のためにはすべてを不足なくやってた。掃除は行き届き、シーツはいつもとり替えられていて食事にも気を使っていた。そんな妻を男は有難いと感謝しながら、なぜか疲れをおぼえるようになった。そんな時、ある酒場の女と知りあった彼はその女と関係を持つようになった。子供の泣

声がきこえる乱雑そのものの女の部屋に寄ると、なぜか妻のそばでは見いだせなかった休息感を感じるという話だった。

勝呂は「酒場の女」に成瀬夫人を重ねたに違いない。初対面にもかかわらず、勝呂は成瀬夫人と大胆な会話を交わし、しかも妻との間ではタブーのようなものである性も話題になった。これが彼にとって新鮮且つ刺激的で、短編小説の中の「妻のそばでは見いだせなかった休息感」を感じたことは想像しやすい。この「休息感」は一見、「いい夫」という〈仮面〉を剥ぎ取り、ありのままの自分に戻って、自分らしく振る舞うことができた解放感であるように思われるかもしれない。しかし、その〈仮面〉の正体は実は夫としての〈責任〉であり、「酒場の女」の「乱雑そのもの」の部屋に寄る時の休息感も本当の自由ではなく、責任逃避による偽りの安楽であって、その安楽のために妻という他者に背くエゴイズムに過ぎないのではないだろうか。勝呂は明らかにそのことを自覚しているだろう。だからこそ彼は「妻からあの短篇を連想した自分が」「やましかった」と感じずにはいられなかったのである。

確かに、勝呂が妻との生活に負担やストレスを感じるようになったのは事実である。ある夜、自分の老いと死に関する夢をみて突然目が覚め、隣のベッドで寝ている妻の「置時計の音」のような「規則正しい静かな寝息」が聞こえる。「あの置時計の音は「…」彼に何とも言えぬ安らぎを与え」、「彼等夫婦が持ちえた平和な落ちつ

きを連想させる」。だが、「なんの疑いもなく両親や兄たちの愛情のなかに育ち、結婚後も夫の仕事や内部に毫も疑惑を持たないできた女の寝息」はまた、「彼に時には羨望を感じさせ、決して口に出したことはないがかすかな憎しみさえ起こさせる」のである。

その「かすかな憎しみ」は、人間の心の暗闇を直視しなければならない作家の責任と、家庭の平和平穏を保たなければならない夫の責任とのズレに由来するものであると思われる。しかし、このズレによる葛藤は家と仕事場を分けることで、ある程度解決できることであろう。勝呂夫婦は三十年以来もこのようにして、バランスのとれた生活を送ってきたのである。今問題となったのは、老いと死の陰影が広がり、「贗者の男」の出現による不意打ちで亀裂が走った勝呂の世界と、「洗濯シャボンの匂いのする」妻の世界の距離が大きく変わっていることである。小説の終盤近く、妻と散歩しながら、勝呂は思う。「俺は、君の知っているような俺じゃない。お前に言っていない秘密がある。お前は俺とそっくりの男がいて、その男と近いうちに会うことも知らない。その男はいやらしく、醜悪で……」。夫の沈んだ気持ちを察して、妻は彼に顔を向け「あなた……ひょっとしてわたくしに何かお話しになりたいことがあるんじゃないかありません？」と不安そうに尋ねた。「皺が寄っている妻の眼ぶたを見ながら勝呂はこの眼ぶたを涙でにじませたくはない、と思った」。妻にあの世界を見せるわけにはいかないという思いで、勝呂は「告白所

の神父のような声」を出して、「安心しなさい」と答えた。

これまでの分析に基づいて言えば、勝呂が置かれている苦境は決して彼の「内面」と「外面」の不釣り合いで簡単に割り切れるようなものではない。不釣り合いなら三十数年前からあったものだ。クリスチャン作家としての悪戦苦闘もそうであり、家庭向きの顔で妻との平穏を保つ努力もそうである。むしろ勝呂は使命を全うする「責任感」、他者を傷つけないとする良心、つまり「意味」を探し求め、それを実現させようとする意志という精神の力で「内面」と「外面」を統合してきたのだ、と言うべきであると思われる。「何のために生きるか」を知る人は「いかに生きるか」を耐えることができる」というニーチェの名言の如き、辛さの背後の意味が分かる人は、その辛さを耐えうる力がある。クリスチャン作家としての成功や夫婦生活の円満は正に勝呂が絶えず「人生の意味」の実現に力を注ぎ続けてきた奨励なのではないか。その力は勝呂の人格の力にはかならない。しかし、今の彼はその力を失っている。「意味」が見えなくなっただけか、かつて実現された「意味」をも否定しようとする別の力に掴まえられた。それはなぜだろうか。次章では、実存分析でさらに勝呂の心理・精神状態を分析し、彼の身に一体何がどのように起こっているのかを明らかにする。

三、勝呂の心理・精神状態

単刀直入にいうと、勝呂の「影」の出現から最後のホテルでの本人との合体に至る全過程を、〈ネクロフィリア的な傾向〉¹¹ へ〈悪〉の衝動が意識化される過程と見なすことができる。

授賞式の夜、人生の頂点に立つ勝呂は、なぜか三十数年前に、彼の小説が「本物ではない」、「胡散臭い」と酷評した斯波という男の言葉が再び聞こえてくる。そして今になっても、その「言葉をはねかえせぬ何かを自分に感じてい」る。勝呂は、それは自分がいままでの作品において、救われるような「罪」は随分書いたが、「悪」についてはほとんど書いてこなかったのが原因だ、と誰よりもわかっている。これからはもう一度真剣に「悪の問題」に向き合っていくこうとする勝呂の決心は容易に推測できよう。分身たる男が最初に現れるのはこの時である。その後、勝呂が六本木の如何わしい店に出入りしている噂が広がり、画中人物がいやらしい表情をしているという「Sの肖像」が糸井素子と石黒比奈の展覧会で確認され、分身たる男はあたかも徐々に頻繁に姿を現すことで自分の実在を勝呂に宣告しているようである。遂に、勝呂が出版社主催の講演会でスピーチしている最中、「影」が不意に入口のところで姿を現し、さらに勝呂の意識に侵入して彼の「偽善」を嘲り、失語させるような一撃を与えた。一方で、勝呂自身もこの「贋者」を捕まえ、対決

しようとしている。しかし、周りの人たちにそれが自分ではなく、自分とそっくりの「贋者」に過ぎないと弁解しながら、それはまさか本当に自分なのではないかというかすかな疑念を勝呂がひそかに抱いているのも事実である。一人で書斎にいたるとき、鏡に映っている自分の顔を眺め、「人生の疲れが残っている顔。黄濁した眼。鬢に随分白髪が混じっている」「六十五歳の顔」、この顔が「あの肖像画とどれだけ違うというのか」と、心の底でそう問うものがある。

この疑念をさらに強め、勝呂の心をかき乱したのはミツの若い肉体に対する彼の情欲である。夢の中で、「洗面所の鏡に（どうして鏡がこの頃、夢の中にたびたび出てくるのか、ふしぎだった）洗いだらした花模様のパンティだけをはいたミツの体がうつっている」。「勝呂が屏のかげにかくれているのを知っていて」、ミツはわざと「少女にしてはあまりに慾情的」な笑いをして彼に「奥さんが怒るもん」と言った。夢の中で慾情的な表情をしているミツは明らかに勝呂自身の欲求にはかならない。無論、この欲望の背後には命に対する渴きが潜んでいる¹²。しかし、目覚めた後も「まぶたの裏に残っている」この「ニッと笑った顔」は、模範的なクリスチャン作家勝呂を困らせ、不安させるには十分すぎる。これを裏付ける明確な証拠となるのは、夢の中に出てくる、他の誰かに見られる可能性を、そしてその可能性に対する苛立ちを暗示する鏡であろう。夢の中の鏡に映っているのはミツの顔であるが、しかしその顔にいやらしい表情を浮

かべたのは畢竟勝呂自身なのだ。

濃霧の夜にかけ、風邪を引いた勝呂はミツの看病を受ける。勝呂には、「ニッとした笑みをうかべた」ミツの顔に「大人に甘える」少女の仕草と「男を誘う」女の媚態との両方が混じりあっているように見える。微かな怯えが勝呂を自制させた。ベッドに入り、「冷えた両足を蠅のようにこすりながら、やがてまた睡魔に身を任せた。夢の中で彼はミツの頬に自分の醜い頬をこすりつけていた。まるでそうやればもう短い自分の人生が一年でも二年でも伸びるような希望に捉えられていた」。キリスト教の象徴体系において、「蠅」はよく「悪魔の手先」を暗示する。¹³⁾「蠅」で自分の動作を形容し、神の国は自分に遠い存在だと心から思った勝呂は、もう長くない晩年に対する苦しみを抱えながら、その苦しみの背後に潜んでいる「悪」をもはっきりと意識している。

しかし、勝呂は意識しすぎたのではないだろうか。最初は「今まで築いた自分の世界を揺さ振ってみたい」といういささか懐疑的な色合いを帯びた思いに過ぎなかったが、勝呂はこの思いを追いかけて、自分の心の中で、夢の中で、人生の隅々で自分の「影」を探し出そうとしている。結局、この思いが徐々に手掌に収まらないほど大きくなり、勝呂を引き付け、誘導し、破壊の瀬戸際に連れていき、完全に彼の世界を崩しかけていた。注意しなければならぬのは、分身たる男にせよ誘惑的なミツにせよ、勝呂が意識しているのはあく

まで彼自身によって作られたものである。要するに、勝呂は自身自身を意識しすぎて、〈過剰自己観察〉(Hyperreflexion)¹⁴⁾という状態に陥っているのである。勝呂がSMの快楽に溺れている糸井素子の顔や彼女が描いた絵を思う時、心に浮かんだ「渦巻きをじっと見てみると、次第に自分もその赤い中心点に向かって吸収されていく感覚」は、まさに〈過剰自己観察〉による悪循環を予言的に語っているのではないだろうか。

まとめて言うとな次のようになる。勝呂は自分の中に潜んでいる〈ネクロフィリア的な傾向〉Ⅱ〈悪〉の衝動を意識化する。これは「影」の出現から本人との合体に至る全過程を貫いている。その過程の中で、勝呂は自分の中にあるかもしれない〈ネクロフィリア的な傾向〉にだけ注目してしまい、次第に〈過剰自己観察〉という心理・精神状態に陥ってしまう。〈自分の中にも悪があるのか〉、〈自分もあの肖像画に描かれたように、いやらしい顔をしているのではないか〉、〈如何わしい店を出入りしている奴はひょっとして僕自身なのではないか〉、〈僕には、ミツを犯そうとする欲望がやはりあったのではないか〉と絶えず考えては確認し、〈人生の意味〉の代りに意識層で志向されるようになった〈ネクロフィリア的な傾向〉をさらに強化し、増大させてしまうことになる。〈分身〉、〈ドッペルゲンガー〉、かつて〈人格分裂〉と呼ばれていた解離性同一性障害の徴候などはこの作品においては単なるメタファー表現に過ぎないといえ、勝呂

には確かにある種の異常が見られる。強い精神病学用語を用いて言えば、〈強迫神経症〉⁵⁵⁾がある程度相応しいかもしれない。

患者は、押し寄せてくる強迫観念に圧迫され、強迫観念を抑圧しようとするという反応を示す。つまり患者は、逆圧をかけようとする。しかし、この逆圧は、もともとの圧迫を一層強くするだけである。再び循環が成立し、再び患者は悪循環に陥る。〔…〕強迫神経症の特徴は闘うことであり、強迫観念に抵抗することである。〔…〕患者は、強迫観念が単なる神経症ではなく、精神病の徴候なのではないかと恐れていたたり、犯罪的な内容の強迫観念を実行に移して、だれか——他人か自分か——に危害を加えるのではないかと恐れていたたりするのである。どちらの場合も、強迫神経症の患者は、不安そのものに対して不安なのではなく、自分自身に対して不安なのである。⁵⁶⁾

分身たる男はつまり、〈自分がとんでもない悪いこと、不道徳なこと、他人を傷つけるようなことをしてしまうだろう〉という強迫観念（圧迫）に当たる。その男をつかまえようとする、あるいはその男が自分であることを否定することは、強迫観念と対決すること（逆圧）を意味する。しかし、勝呂は何によって闘っていったのだろうか。時々刻々と自分の状態を確認するという〈過剰自己観察〉、つまりある種の〈自己中心〉にはかならない。右に引用したフランクルの定義に倣って言うと、勝呂は〈ネクロフィリア〉Ⅱ〈悪〉

そのものに対して不安なのではなく、自分自身に対して不安なのだ。⁵⁷⁾従って、自己中心的な心理・精神状態で自分自身に対する不安を抑えようとする試みはまるで火に油を注ぐ如き、結局はその不安の破壊力を更に増幅させてしまうことになるのではないだろうか。

誤解を避けるために明確にしなければならないのは、〈過剰自己観察〉は〈強迫神経症〉とは全く違う概念であり、また〈過剰自己観察〉は必ずしも〈強迫神経症〉を引き起こすとは限らない、ということである。繰り返しになるが、〈過剰自己観察〉は端的に言えば、注意が専ら自分自身あるいは自分の状態だけに向けられる、という自己中心的な態度の問題であり、病気などではない。一方で、〈強迫神経症〉（強迫症）は確実に治療（場合によっては薬物療法）の必要性がある精神疾患であり、患者の日常生活に支障をきたしたり、苦痛を感じさせたりしていることがその重要診断基準の一つである。論者が勝呂の今の心理・精神状態を分析するのにこの概念を用いたのは、彼が強迫神経症を罹患していることを主張するためではなく、勝呂が今こたわっている〈自分の中に悪が潜んでいる〉という考えが侵入的且つ不適切なもので、すなわち強迫観念的なものであることを強調したためである。従って、より厳密にいうと、勝呂が今体験している異常は、〈強迫神経症〉そのものとは言い切れないが、〈強迫神経症的〉な非日常状態なのだ、ということである。

おわりに

勝呂の心理・精神状態が明らかになった地点で、また新たな問題が浮かび上がってくる。以上の分析を踏まえてみると、勝呂を破滅の淵の一步前までに追い詰めたのは〈ネクロフィリア的な傾向〉そのものの力というよりも、むしろ勝呂自身の不健康な心理・精神状態なのだとすべきであろう。だとすると、『スキャンダル』における「悪の問題」は単に「悪の発見」に止まらず、〈悪〉を意識化したあと如何にすべきか、という「悪の認識」あるいは〈悪〉に対する態度の問題にも繋がっていく。逆に言うと、〈ネクロフィリア的な傾向〉は、必ずしも強迫観念になって強迫神経症を引き起こすというわけではないし、たとえ人間の無意識に潜む普遍的なものであったとしても、全ての人を犯罪に走らせるとは限らないのである。では、勝呂に見る〈強迫神経症的〉な危機はどのように起こったのだろうか。紙幅の都合上、詳しい考察は続稿に譲るしかないが、簡単に言えば、勝呂の中に強迫観念の「種」を蒔いたのは主として東野という精神分析学者と成瀬夫人の二人でありながら、勝呂自身もその「種」を受け入れるための「土壌」を用意して、「種」の芽生えから成熟までの「成長」に一翼を担ったのである。ここまで論じてきた〈過剰自己観察〉は正にその「種」の成長を促すための最高の養分となるのである。結果的に、その「種」は、人の人格を矮

小化し、人間性を破壊してしまうような大きなもの、即ち「スキャンダル」になっていくのだ。

勝呂にとっての救いの可能性は果たして何処にあるだろうか。本来、〈過剰自己観察〉が原因でストレスを感じて、〈精神障害的〉な症状が出たクライアントに、自分自身の外にある〈意味〉や〈使命〉または〈他者〉に目を向けさせ、精神の次元に刺激を与えることで、当人が自ら〈自己超越 (Selbsttranszendenz)〉¹⁸⁾の能力を発揮できるように導くのがロゴセラピーの一般操作であり、目標である。この目標を最終的に達成すべく、先ずはクライアントが自分の置かれた状況・苦境から距離を取って、客観的な位置から今自分を制約している問題を眺めることができるようになる必要がある。これはいわゆる〈自己距離化 (Selbst-Distanzierung)〉のことである。

実は、『スキャンダル』の中で、勝呂は一度〈自己距離化〉を実現しそうになったことがある。それは彼が妻と一緒に二十年ぶりに長崎へ旅行に行ったことを通してである。「この冬から襲ってきたいくつかの出来事に、次第に不安をつのらせた。それから逃れるために妻と二人きりになりたかったし、二人で静かな土地で何日間かを過ごしたかった」。東京を離れ、成瀬夫人や贗者など〈悪〉につながる一切のものを離れて、勝呂は長崎の地で再び「あたたかい幸福感が体の内側から湧いて拡がってくるのを感じた」。また妻という〈他者〉に対して、勝呂は、この夫婦二人きりの旅行には「共同

で長い苦勞を重ねた者だけが知っている深い連帶感と信頼感が含まれていて、改めて「この女を人生の伴侶にしたことに満足した」という。

しかし、物理的に東京の日常から離れ、〈過剰自己観察〉の問題が一時的にそれほど深刻ではなくなったというものの、〈悪〉に関する強迫観念は勝呂の心から去らなかつた。「死ぬ時も神さまに有難うございましてと言えそうな気がするわ」と言つた妻を見て、勝呂はまた糸井素子や成瀬夫婦のいる「あの世界」を思い出し、妻に「お前はいいなあ」「羨ましいいよ」と言つて嘆息を洩らした。勝呂は〈悪〉の強迫観念に囚われているのである。しかし彼はこれを認識しておらず、〈悪〉を擬視しようとする欲望が作家として「三十年以上も生きつづけているうちに」自分の本能になつていたものであると考へている。勝呂にとっての救いは、元々は「種」ではないが、徐々に彼を支配する大きなものになつていく〈悪〉の強迫観念を根元から抜き取るにかかつているのである。残念ながら、今の勝呂にとってそれは自力だけでどうにかできるようなことではあるまい。詳しくは稿を改めて論じたいが、端的に言えば、悪の暗闇に堕ちかける勝呂は、〈他者〉に目を向けることで、つまり〈他者〉の力によって、〈悪〉の強迫観念による支配から脱出し、「我に返つた」のである。

注

- (1) 「たましいへの通路としてのスキャンダル」「世界」(一九八六年八月号)、後に新潮文庫版『スキャンダル』(一九八九年二月)の「解説」として収録される。
- (2) フランクルと遠藤との関連性、フランクルのロゴセラピーについては、拙論「遠藤周作『死海のほとり』における「美しい世界」の意味―フランクル『夜と霧』を手がかりに」(『近代文学試論』第五五号、二〇一七年二月)を参照頂きたい。
- (3) 実存分析 (Existenzanalyse) は、ロゴセラピー (Logotherapie) の人間学や哲学の部分であり、治療法の理論基礎である。
- (4) 「遠藤周作『スキャンダル』における「悪の問題」―ヴィクトール・フランクルとエーリッヒ・フロムの言説を手がかりに」(『遠藤周作研究』第三号、二〇一〇年九月)、『スキャンダル』における〈悪〉を、エーリッヒ・フロムが定義した〈ネクロフィリア〉という概念を用いて考察したものである。
- (5) エーリッヒ・フロム『悪について』(一九六四年)を参照。『スキャンダル』の中で、精神分析派心理学者である東野による次のような説明がある。「ネクロフィリア的な人間は「…」自己破壊や下降や堕ちていく傾向があります。その傾向が強くなると無生物や無機物の状態に戻ろうとする強い欲望を持つことがあります。」
- (6) 徳村歩「遠藤周作『スキャンダル』の考察―両性の非対称と悪の構造について」(『沖縄国際大学語文と教育の研究』第一号、二〇〇〇年三月)。
- (7) 虎岩正純「重層性の寓話―『スキャンダル』『深い河』論」(『国文学解釈と教材の研究』一九九三年一〇月)。
- (8) 「遠藤周作『スキャンダル』論―勝呂の「二面性」と加虐の〈欲望〉―」(『遠藤周作研究』第一一号、二〇一八年九月)。

(9) 「覆われしもので顕われざるものなく、隠されたもので知られざるものはなし」。霧の夜、勝呂が異常な心情で聖書から抜書きした聖句である。聖書原文は「だから、彼らを恐れてはいけません。おおわれているもので、現されないものではなく、隠されているもので知られずに済むものはありません。」(「マタイによる福音書」一〇章二六節、新改訳)

(10) フランクルの用語、「人間に特有の現象を人間以下に還元したり、あるいは人間以下の現象から人間に特有の現象を演繹したりする、見せかけの学問的方法」を「下位人間主義」と定義する。(『意味への意志』山田邦男監訳、春秋社、二〇〇二年七月、二二〇頁)を参照。

(11) 「人生においては、誰もが自分にしかできない仕事、その人に成就されることを待っている具体的な使命を持っています。それは他の人が代わりに果たすことはできませんし、その人の人生でふたたびくりかえされることもありません。したがってそれぞれの人間にとって、いまここにある意味ある課題は、この課題を実現するために与えられた可能性と同様、かけがえない唯一のものなのです。」(フランクル『ロゴセラピーのエッセンス 18の基本概念』赤坂桃子訳、新教出版社、二〇一六年一〇月)

(12) 大塩香織「遠藤周作『スキャンダル』論―勝呂の〈二面性〉と加虐の〈慾望〉―」(前掲)、または拙論「遠藤周作『スキャンダル』における「悪の問題」―ヴィクトール・フランクルとエーリッヒ・フロムの言説を手がかりに―」(前掲)を参照。

(13) 兼子盾夫『遠藤周作の世界―シンボルとメタファー―』(教文館、二〇〇七年八月、一三三頁)

(14) 「過剰自己観察」というのは、その名の通り、〈自分自身もしくは自分をめぐる状況について過剰に考えをめぐらす態度〉です。一般的に他人のことよりも、自分自身に対する関心が非常に強く、自分「…」の状況をたえず観察しています。ですから、ひとたび何かの病気にかったり、

不幸な出来事に出遭ったりすると、話題はそのことだけに集中してしまい、自分の自己憐憫で周囲の人が辟易しているかどうかなどということは気づかないわけです。」(勝田茅生『神経症のロゴセラピーI』株式会社システムパブリカ、二〇一〇年三月)

(15) DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders : 精神疾患の診断・統計マニュアル第五版、二〇一四年)における正式な名称は強迫症である。

(16) ヴィクトール・フランクル『宿命を超えて、自己を超えて』(山田邦男・松田美佳訳、春秋社、一九九七年一〇月、一五九頁)。

(17) 勝呂は成瀬夫人に見られる〈ネクロフィリア的な傾向〉に対してはあまり不安にならず、却って興味を持っている、ということから見れば、彼の不安は〈悪〉そのものに対するものではないことがわかる。

(18) 「『自己超越』というのは、人間が自分自身を超えて、自分自身ではない何か、何かの対象化誰か他の人に向かっていくことなのです。つまり実現することに価値のある意味に向かって、あるいは、自分の出会った周囲の人間に向かっているのです。」(Der Wille zum Sinn: Ausgewählte Vorträge über Logotherapie, Piper Verlag, München, 4. Aufl. 1997. 訳文は勝田茅生『危機の克服と予防』(システムパブリカ、二〇〇八年三月)による)。

〔付記〕

本稿は、二〇二〇年度日本キリスト教文学会中国支部大会(二〇二〇年二月二六日、ノートルダム清心女子大学)における口頭発表を基に大幅修正したものである。『スキャンダル』の本文引用は『遠藤周作文学全集』第四巻(新潮社、一九九九年)による。

―にい・らくひ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学―